

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Irregular sound changes in Chinese body-part nouns (2) : the case of anklebone

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2003-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 齋, Ota, Itsuku メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/806">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/806</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 漢語の身体名称に見られる特殊変化 (2)

—「踝」の諸語形をめぐる憶説—

太 田 齋

### §3 “踝拉骨”の“拉”

“踝拉骨”の“拉”が如何にして成立したのかについては幾つかの過程が想定し得る。先ずは paradigmatic な変化要因について検討することしよう。

陝西蒲城：核桃侷拉 xur<sup>24</sup> t<sup>h</sup>au<sup>31</sup> k<sup>h</sup>ua<sup>53</sup> la<sup>31</sup> 踝骨 709

河北曲陽：脚胛骨 踝子骨 词汇267

河北获鹿：胛骨头 踝子骨 词汇267

上掲例については、その字面から「股」との混交によって生じた可能性が考えられる。“踝”は音韻法則に則って規則的に変化すれば、北方方言においては“胛”と声母しか違わないことになる。今普通話で例えれば“踝骨 huàgǔ：踝”：“胛骨 kuàgǔ：髌骨”となるはずであった。上の陝西蒲城、河北曲陽、獲鹿方言の「踝」の例はその字面から、このような音声的類似を契機として「股」との間に混交を生じ、成立したのと考えてよい。曲陽方言の例は“踝骨”が類音牽引で“胛骨”と同音になって、同じ漢字表記が為されるようになり、紛らわしいので両者を区別するために前者に「足の」+“胛骨”と説明要素を付加したものであろう。後者についての記載がないので、こちらは“胛骨”のままなのか、それとも語呂をあわせるべくこちらも何らかの説明要素を付したもののなのか不明である。このように「踝」と「股」が相互に特殊な音声変化を生じさせるような関係にあることが認められるが、

それが広域的に認められるかどうかについては、慎重であらねばなるまい。

以下の「股」,「股下」,「髌骨」を意味する方言語彙の例を参照されたい。

山东博山：胯骨  $k^{h}ud^{31-55}ku^0$  研究 136

山东莒县：胯骨  $k^{h}ua^{31}ku^{55-13}$  125

河北定兴：胯骨/ $kua^{314-31}gu\sim ku/$  159

山东威海：胯胯拉子  $k^{h}ua^{312}k^{h}ua^0la^{33}ts\eta^0$  胯骨 山东 190

山东淄川：胯子  $k^{h}ud^{31-55}\theta^0$  胯骨 84

山东桓台：胯子  $k^{h}ud^{31-55}ts\eta^0$  腰两侧和大腿之间 志 701

---

甘肃陇西：髌/ $ke^2/$ 那里 胯下 706

甘肃舟曲：髌/ $k\grave{e}i/$ 拉 大腿裆 676

甘肃天水：合拉  $\zeta k^{h}uo\ la$  胯下 普通 2590

山东平度：腿卡拉  $t^{h}ei^{55-45}k^{h}a^0la^0$  胯下 118

河南舞阳：腿珂拉  $t^{h}ei^{53}k^{h}u^{31}la^{24}$  两腿间 61

河南原阳：腿开拉  $\zeta t^{h}uei\ \zeta k^{h}ai\ la$  胯下 普通 2590

---

山东阳谷：腿昏晃  $t^{h}uei^{53}k\theta^{13}la^{42}$  两腿中间 (=曹县, 枣庄) 山东 191

山西太原：腿昏晃  $t^{h}uei^{53}k\theta^{54-2}la^{45}$  大腿根儿 词典 114

山西平遥：腿昏晃儿  $t^{h}u\ae^{53}k\Lambda^{54}l\alpha^{13-31}z\Lambda^{23-45}$  大腿根儿 119

山西沁县：腿昏晃  $t^{h}uei^{213-41}k\theta^{24}l\Lambda^{24}$  31

山西临汾：腿圪拉儿  $\zeta t^{h}uei\ \zeta ku\ l\er$  胯下 普通 2590

山西长治：腿圪拉  $\zeta t^{h}uei\ k\theta^{25}\ \zeta la$  胯下 普通 2590

---

山东博山：腿哈拉  $t^{h}uei^{55-214}x\alpha^0l\alpha^0$  胯下 研究 136

山东新泰：腿昏晃儿  $t^{h}uei^{55}x\theta^{213-212}lar^0$  指肛门和生殖器部分 82

山东济宁：(腿)哈拉儿 ( $\zeta t^{h}uei$ )  $\zeta x\theta\ \zeta lar$  胯下 普通 2590

河北张家口：腿哈拉  $t^{h}uei^{55}x\gamma^{32}l\alpha^{42}$  胯下 志 1909

河北广平：腿合拉 胯下 (=邯鄲县) 词汇 266

河北巨鹿：腿閩沓儿 t<sup>h</sup>ei<sup>53</sup> xə<sup>31</sup> lar<sup>21</sup> 两腿之间 703

河南洛阳：腿黑拉儿 t<sup>h</sup>uei<sup>53</sup> xu<sup>33</sup> ləu<sup>0</sup> 腿裆的空隙 研究 156

山西忻州：腿黑拉儿 t<sup>h</sup>uei<sup>53</sup> xə<sup>72</sup> lər<sup>53</sup> 裆，两条腿的中间 159

河南濮阳：嘿啦 xe<sup>55</sup> la<sup>213</sup> 胯 95

河北平山：合拉 c<sup>h</sup>xə c<sup>h</sup>la 胯下 普通2590

河北滦县：合拉 胯下 (=三河，建屏，平山，井陘，赞皇)  
词汇 266

河北乐亭：哈拉 胯下 词汇 266

甘肃兰州：合拉 c<sup>h</sup>xɿ c<sup>h</sup>na 胯下 普通 2590

甘肃武威：合拉 胯下 762

新疆乌鲁木齐：合拉 c<sup>h</sup>xə la<sup>2</sup> 胯下 普通 2590

内蒙古科尔沁：哈拉巴 髌骨 978 =内蒙古乌兰浩特 933

甘肃永昌：哈喇叭 两股间至两腿分岔处 1016

“沓兒”は普通話と同じであれば、「隅っこ，端っこ」というような意味で，“腿沓兒”は太ももの付け根ということになる。ただし，方言によっては指示する場所がずれて「股」を示すようになっている場合もある。“合拉”の方は普通話の“縫儿”に似て「割れ目，裂け目」を表すが，また指の付け根や太ももの付け根のような枝状に分かれる部分をも指すと考えられる（後で改めて論ずる）。山東威海方言の例を除けば，“腿～”ばかりで，“胯哈拉”，“胯坨拉”，“胯沓兒”に該当する方言語形の報告例はない。管見の及ぶ限りで“腿胯”というような語形の報告例も見当たらないのだが，“哈拉”，“坨拉”，“沓兒”はその形態上の特徴からみて“胯”が変化した，もしくはこれらと何らかの類音関係にある語が“胯”に取って替わったものと思われる。後者であれば，“腿胯” — “土块”の音声的類似を挙げることができる。“土块”はまた多く“土坨拉”のような言い方をすることから，“哈拉”，“坨拉”，“沓兒”への連想が働き，前者を“腿哈拉”，“腿坨拉”，“腿沓兒”

のように言うようになったのかも知れない。“土坷拉：土くれ”との類音牽引については以下の例を参照されたい：

- 山东平度：腿卡拉 t<sup>h</sup>ei<sup>55-45</sup> k<sup>h</sup>a<sup>0</sup> la<sup>0</sup> 胯下 118  
土坷拉 t<sup>h</sup>u<sup>55-45</sup> k<sup>h</sup>a<sup>0</sup> la<sup>214</sup> 91
- 山西临汾：腿圪拉儿 ʔ<sup>h</sup>t<sup>h</sup>uei ɕku lər 胯下 普通 2590  
土疙瘩儿 t<sup>h</sup>u<sup>51</sup> ku<sup>13</sup> t̃a<sup>0</sup> 土块儿 66
- 山东阳谷：腿沓晃 t<sup>h</sup>uei<sup>53</sup> kə<sup>13</sup> la<sup>42</sup> 两腿中间 (=曹县, 枣庄) 山东 191  
坷拉 k<sup>h</sup>ə<sup>55-22</sup> la<sup>0</sup> 土块儿 (=枣庄) 山东 15  
脚合晃 tcyə<sup>13</sup> xə<sup>42</sup> la<sup>13</sup> 脚趾缝 (=菏泽) 山东192
- 山西长治：腿圪拉 ʔ<sup>h</sup>t<sup>h</sup>uei kəʔ<sup>5</sup> ɕla 胯下 普通 2590  
土圪拉 t<sup>h</sup>u<sup>535</sup> k<sup>h</sup>əʔ<sup>54-4</sup> la<sup>213-44</sup> 75

- 
- 山东博山：腿哈拉 t<sup>h</sup>uei<sup>55-214</sup> xɑ<sup>0</sup> la<sup>0</sup> 胯下 研究 136  
土拉块 t<sup>h</sup>u<sup>55-214</sup> la<sup>0</sup> k<sup>h</sup>ue<sup>31</sup> 土块 研究 114  
坷拉 k<sup>h</sup>ɑ<sup>214-22</sup> la<sup>0</sup> 地里的土块 研究 114
- 山东新泰：腿沓晃儿 t<sup>h</sup>uei<sup>55</sup> xə<sup>213-212</sup> lar<sup>0</sup> 指肛门和生殖器部分 志 82  
土拉 t<sup>h</sup>u<sup>55-213</sup> la<sup>0</sup> 土 志 67  
坷拉 k<sup>h</sup>ə<sup>55-213</sup> la<sup>0</sup> 土块 志 67  
坷拉蛋 k<sup>h</sup>ə<sup>55-213</sup> la<sup>0</sup> t̃ɑ<sup>31</sup> 志 67
- 河北张家口：腿哈拉 t<sup>h</sup>uei<sup>55</sup> xyʔ<sup>32</sup> la<sup>42</sup> 胯下 志 1909  
土坷拉 t<sup>h</sup>u<sup>55</sup> k<sup>h</sup>xyʔ<sup>32</sup> la<sup>42</sup> 土块儿 志1903
- 河北巨鹿：腿阂晃儿 t<sup>h</sup>ei<sup>53</sup> xə<sup>31</sup> lar<sup>21</sup> 两腿之间 703  
坷拉 k<sup>h</sup>ə<sup>33</sup> la<sup>21</sup> 土块 693  
坟阂晃 fən<sup>31</sup> xə<sup>31</sup> la<sup>21</sup> 坟与坟之间的空地 693
- 河南洛阳：腿黑拉儿 t<sup>h</sup>uei<sup>53</sup> xu<sup>33</sup> ləw<sup>0</sup> 腿裆的空隙 词典126  
圪晃儿 ku<sup>33</sup> ləw<sup>0</sup> ①狭窄偏僻的地方②角落 词典12
- 河南濮阳：嘿啦 xe<sup>55</sup> la<sup>213</sup> 胯 95

坳拉  $k^h e^{33-34} la^{33}$  土块儿 47

山东济宁：(腿)哈拉儿 ( $^c t^h uei$ )  $\underline{c} x \theta \underline{c} lar$  胯下 普通 2590

土坳拉  $t^h u^{55} k^h \theta^{55} la^{13}$  土块儿 山东 15

坳拉  $k^h \theta^{55-22} la^0$  土块儿 山东 15

坳拉头儿  $k^h \theta^{55-35} la^0 t^h our^{42}$  土块儿 山东 15

脚沓晃子  $tcie\theta^{213-35} k^h \theta^{213-13} la^{43-54} ts\eta^0$  脚趾缝 山东 192

今のところ“腿哈拉”，“腿坳拉”，“腿沓晃”三者がどのようにして成立したのか、及び三者相互の関わりがどのようなものであるのか解明できていない。ただ“腿坳拉”については先に“腿哈拉”，“腿沓晃”があって、それと“土坳拉”との間に類音牽引が生じてできたのではないかと考えられる。筆者の調べた限りにおいては“胯骨：髌骨”，“(腿)合拉：股下”が混同されて用いられているような状態はあるにせよ、「股」が“(腿)哈拉骨”，“(腿)坳拉骨”，“(腿)沓晃骨”のような語構成で現れる例はない。それゆえ「股」を表す“(腿)哈拉”，“(腿)沓晃”が“踝拉骨”より先に成立していたとしても、これらと“踝骨”の間には十分な音声的類似が見られないから，“踝骨”がこのような「股」を表す語形よりの類推で“踝拉骨”のような語構成をとるに至ったとは考え難い。“踝拉骨”の成立を論じるに当たって、この「股」と「土くれ」の類音牽引は関連するところはなさそうであり、考慮するには及ばないようである<sup>(8)</sup>。

以上論じてきたところでは説得力のある説明は見出せなかった。今もう一つの解釈の可能性を検討してみたい。それは§1で推定した  $yua\ ku\theta t \rightarrow yuat\ ku\theta t$  の形式から更に  $yuat\ ta\ ku\theta t \rightarrow yuat\ la\ ku\theta t \rightarrow xua\ la\ ku$  のような変化が生じたと見るものである。つまり入声韻尾を添え物の母音を加えて二音節化して保つという変化である。添え物の母音は恐らく前後の音節如何で音価が異なるものと考えられる。現代北方方言においては  $-p, -t, -k$  及び  $-m$  といった韻尾は失われてしまったが、一部の複合語の中にその痕跡を見ることができる。それについては既に太田(1995)で示したが、今改め

て該当すると思われる例を挙げる：

山东利津：𦉳么 syə<sup>53-55</sup> mə<sup>0</sup> 不住地小视(贬) 105 ← “寻”

𦉳么 t<sup>h</sup>iã<sup>35-212</sup> mə<sup>0</sup> 用舌头不断地舔 106 ← “舔”

山东聊城：蚕妹儿 ts<sup>h</sup>ã<sup>42-44</sup> meir<sup>0</sup> 蚕 107 ← “蚕儿”

山东枣庄：今门儿 tciē<sup>213-212</sup> mer<sup>0</sup> 今天 78 ← “今日”

山东曲阜：今每儿 tci<sup>212-211</sup> meir<sup>0</sup> 今天 志 58 ← “今日”

cf. 今门儿 tciã<sup>13</sup> mər<sup>0</sup> 今天 通讯 130 ← “今日”

山东济南：今每儿 tciã<sup>213-21</sup> mər<sup>0</sup> 今天 志 44 ← “今日”

tci<sup>213-21</sup> mər<sup>0</sup> 今天 志 44 ← “今日”

河南濮阳：今们儿 tci<sup>3-34</sup> mər<sup>0</sup> 今日 67 ← “今日”

河南汤阴：砍马刀 螳螂 558 ← “砍刀”

山东东营：夹巴道儿 tcia<sup>55-44</sup> pa<sup>0</sup> tər<sup>31</sup> 小胡同 1431 ← “夹道儿”

河北滦南：ʂl<sup>33</sup> pə<sup>0</sup> 涩 96 ← “涩”

山东临清：不拉 pu<sup>323-44</sup> la<sup>0</sup> 拨动 111 ← “拨”？；“拨” 214(阴平) 12

山东利津：蜜拉 mi<sup>21-44</sup> la<sup>0</sup> 甜食，显出感到香甜的样子 106 ← “蜜”？；

“蜜” mi<sup>21</sup>(去) 21

上掲例には異論の余地のあるものもあり，中には類推，民間語源などによって出来上がった語形もあろう。問題なのは -p, -m の例は比較的類例を見つけ易いが，-t, -k の例については確たるものがないということである。このことが何らかの音声上の理由によるものなのかどうか，また複合語に見られるこのような残り方が単字音の音韻変化とどのように関係するかについても検討せねばならないが，ここではこれ以上は触れない。いずれにせよこれらの韻尾の消失の先後関係については一先ずは同様と考えてよからう。そうであれば入声韻尾消失の過程で，-p（及び陽声韻尾の -m も）のみ残して -t, -k は失われている，若しくは -? に合流してしまっているような言語状況が広く分布していたと想定せねばならなくなる。これはやや不自然である。或いは -t, -k の方は異なった姿をとって保存されているかもしれない。上掲例

が正しく該当するものであれば、-t が l- として保存されていることになる。-k の方は例えば x- のような類似の声母として保存されているかも知れない。注意して探せばこれらについても該当例を見出すことができるのではないかと考える。本稿で対象としている“踝骨”はもし §1 で述べたことが正しいければ、その成立がかなり古いことになり、現代方言に -t 入声韻尾の特殊な保存の仕方の例が見出し難くとも、それが直ちに推定を否定することにはならない。上掲の -p の例から考えれば、yuat kuət → yuat ta kuət のような分音を想定することは決して空論ではない。添え物の母音については無から有を生じたのではなく、何らかの語彙的意味を担っていた音節が音声的にも意味的にも「虚化」していたような状況が先にあった場合もある。上掲例で言えば山東聊城の“蚕妹儿”は“儿”[ɤ]が先行音節の韻尾と同じ音を自らの声母として取り込んで“妹儿”[meir]となったものだし<sup>9)</sup>、山東曲阜方言などの「今日」は“日”が[ɤ]となった後にやはり先行音節の韻尾と同じ音を自らの声母としたか、若しくは先行音節声母を自らの声母として取り込んだと考えられる。これ以外の例も同様に何らかの実詞にその來源を求めることができるものがあるだろうが、これについては今は可能性を指摘するに留めておく。yuat kuət → yuat ta kuət のような変化は現代方言の中に類例を求めることができる。既に太田(2001)で指摘した複合語中の頭位でない音節の声母 t が l となる例は以下の通り：

- 河北河间：扑楞蛾 p<sup>h</sup>u<sup>44</sup> ləŋ<sup>0</sup> uo<sup>53</sup> 灯蛾 776  
 cf. 河北昌黎：扑灯蛾儿 p<sup>h</sup>u<sup>32-33</sup> təŋ<sup>32-33</sup> ŋɤr<sup>13</sup> 灯蛾 187  
 河北赵县：皮拉虎子 传说中的狐狸精 549  
 cf. 山东临清：貔达驹子 p<sup>h</sup>i<sup>53-553</sup> ta<sup>0</sup> xəu<sup>323-44</sup> tsɿ<sup>0</sup> 传说中为崇怪兽，有人说指狐狸精 103  
 山东曲阜：餐拉木子 ts<sup>h</sup>ā<sup>213-211</sup> la<sup>0</sup> mu<sup>213-211</sup> tsɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 志 63  
 cf. 山东济南：餐打木子 ts<sup>h</sup>ā<sup>213-21</sup> ta<sup>0</sup> mu<sup>0</sup> tsɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 志 47

ここで先に挙げた“合拉”に再度注目すると、語源が“豁”であるらしい



ことに気付く。以下の例を参照されたい：

河北新乐：脚豁拉 脚趾缝儿 (=灵寿) 词汇 268

天津市：豁拉缝 豁唇子 词汇 465

天津市：豁拉缝  $\text{cx}\text{x} \text{la} \text{f}\text{ə}\text{ŋ}^?$  豁嘴儿 普通 2749

河北迁安：豁拉嘴儿 豁唇子 词汇 465

---

山西忻州：指头黑拉儿  $\text{ts}\text{ə}^?^2 \text{t}^{\text{h}}\text{əu}^{\text{53}} \text{x}\text{ə}^?^2 \text{l}\text{er}^{\text{53}}$  手指缝儿 318

これらの例にみられる“拉”もまたその由来が如何なるものであるのか解釈に苦しむ。“豁”は中古音の帰属は“山合一入末晓”，広韻の反切は“呼括切”である。“豁”もまた  $*\text{xuat} \rightarrow \text{xuat} \text{ta} \rightarrow \text{xuat} \text{la} \rightarrow \text{xu}\text{ə}^? \text{la} \rightarrow \text{xu}\text{ə} \text{la}$  のような変化を遂げたものである可能性がある<sup>(10)</sup>。但し普通話でも“窟窿  $\text{kūlong}$ ” (← “孔  $\text{kōng}$ ”), “机灵  $\text{jīling}$ ” (← “精  $\text{jīng}$ ”), “旮旯  $\text{gāla}$ ” (← “角  $\text{jiǎo}$ ”) のような分音式語構成の名残のようなものがあり，また“罗唆  $\text{luōsuo}$ ” → “罗哩罗嗦  $\text{luōlīlūōsuo}$ ” のような造語法もあるが，そこでは多く  $\text{l-}$  が利用されている。また各地の方言には「反切語」という名称に代表される，一音節を二音節に分けるような言葉遊びがあるが，その場合にも  $\text{l-}$  が利用されることが多い。現時点で他に類例が見当たらないので，即断は慎むべきであるが，本稿で検討してきた“拉”の成立についての幾つかの可能性の中では最も考慮に値するものである。

#### §4 踝 [xuai] 拉骨

“踝拉骨”という語構成の語彙の中で少数ながら“踝”が [xuai] (陽平) となっている例がある：

陝西麟游：踝拉骨  $\text{xu}\text{ə}^{24-31} \text{la}^{31-44} \text{ku}^{31}$  踝骨 584；

陽平調値24，去声調値44

陝西千阳：踝那骨  $\text{xu}\text{ə}^{24} \text{la}^{44} \text{ku}^{21}$  踝骨 360；陽平調値24，去声調値44

吉林通化：踝拉骨  $\text{cx}\text{xu}\text{ai} \text{l}\text{ə} \text{ku}$  踝子骨 普通2592

内蒙古呼和浩特：踝拉骨 xuai<sup>32</sup> la<sup>32</sup> kuə?<sup>43</sup> 踝子骨 566

河北张家口：踝拉骨 ɥxuei ɥla kuə?<sup>5</sup> 踝子骨 普通2562

河南原阳：踝拉骨 ɥxuai lə ɥku 踝子骨 普通2562

河北阳原：踝拉骨 ɥxuei lə kuə?<sup>5</sup> 踝子骨 普通2562

この五つの方言については所拠文献によれば、名詞接尾辞“子”はいずれも [tsɿ] である。これが弱化音節にあって [lə] のように変化したとの推定も可能だが、ts- →l- の変化を示す実例はまだ見ない。今のところ、他に三つの解釈の可能性がある。その一は当該例を有する方言において、本来の“子”尾相当の接尾辞の音声形式はこれと異なっていたかも知れないというものである。普通話の浸透、普及によりそのような接尾辞はほとんど普通話の [tsɿ] に取り替えられてしまい、僅かな常用語彙の中にのみ痕跡的に残っているという可能性もあろうかと思う。もしそうであれば、方言によっては“踝 [xuai] 子骨”の“子”が、形態的に“拉”に類似した“子”尾相当接尾辞と混同されてこれに取り替えられ、\*xuai lə ku のようになり、然る後に疊韻化（主母音の一致）を起こして \*xuai la ku となったというようなこともあり得たことになる。ここで示した [lə] は例えばの表記で、厳密な検討を経たものではない。この解釈に立てば、この“子”尾相当接尾辞が意味的に“子”に相当する方言固有語であるのか、“子”の字音（止開三上止精）と系譜関係があるかというような問題についても検討が必要となってくる。

北方方言の名詞接尾辞“子”は方言間で様々な変異を示し、機能的には対応しているが、同源ではないのではないかとの疑いを持たせるものも少なくない。以下はそのようなもののうち、t, l, z, といった声母で現れる例であるが、漢字表記及び声調調値は省略した：

山东牟平：tə 108＝山东微山(张楼，西平，赵庙) 1107，河北成安781，  
峰峰91，获鹿5，井陘 649，沙河764；河南汤阴563；  
山西忻州151

- 河北正定 : /de/ 814
- 河北魏县 : tɛ 68 = 河南商丘 简释407-415
- 河北大名 : tɛ ~ tə 646
- 山东菏泽 : tə ~ tɤ ~ ta 671-673
- 河南虞城 : /dei/ 520 = 山东曹县 普通191
- 河南濮阳 : tɛ 491
- 山西临猗 : təu 638
- 河北武安 : təʔ 879 = 山西长治108, 並关686, 寿阳 34
- 河南安阳 : tɿʔ 1065
- 山东东明 : tɛ ~ trɛ ~ tə ~ trə ~ tri 543
- 山东邹平 : tə ~ nə 863 = 山东定陶 696-697
- 河南睢县 : tɛ ~ nɛ 468-469
- 山西河津 : tei ~ nei 472
- 河南商丘 : tɛ ~ lɛ ~ nɛ 研究37
- 河南商丘 : tei ~ lən ~ nən 志515-522
- 山西五台 : leɪ ~ lə ~ tə 559
- 山西平顺 : lə 379
- 河南林县 : ləʔ ~ ɤ 616
- 山西沁县 : ləʔ 2
- 山西介休 : tsʌʔ ~ lʌʔ ~ zʌʔ 3
- 山东烟台 : rə 5
- 河北赤城 : /re/ 578
- 山西代县 : zəʔ 462

中には形態的にはむしろ“儿”の字音を思わせるようなものもあるが、いずれの方言においても別に“儿”尾が存在する。先に述べたように、肝心の上掲4方言の“子”尾はいずれも [tsɿ] であって、[lə] ではないということがこの説の弱点である。その二は“踝 [xuai] 子骨”と同様の発想で“踝

儿骨”という語形が生まれたとするものである。或いは方言間借用で取り込んだ“踝[xuai]子骨”の“子”を同義語の“儿”に取り替えたとしても良い。方言によっては“儿”が[lə]のような音声形式になっているものがある。そのような“儿”を持ち、かつ名詞接尾辞“子”を本来使用しない方言にあっては、“踝[xuai]子骨”の“子”を訓読みして、\*xuailəkuのような音声形式に変えることもあり得る。但し当該方言の“儿”の字音は[lə]ではない。これについても本来の字音は[lə]であったが、後に普通話の影響で[x]となってしまうと考え、“踝[xuai]拉骨”の“拉”を古い“儿”の字音を残していると考え、そのような古い“儿”と思しき字音を持つ類例が見当たらない。その三は“踝[xua]拉骨”と“踝[xuai]子骨”のぶつかり合いでその中間形態の“踝[xuai]拉骨”ができたというものである。この考えは§2.2で“踝[xua]子骨”を解釈するとき指摘したのと同様の推定である。“踝[xua]子骨”というタイプの語形は山東、河北に分布し、“踝[xuai]拉骨”の方は吉林以外については陝西省及び晋語圏に分布する。二つの語形のぶつかり合いは、“踝[xuai]子骨”が優勢の地域で“踝[xua]子骨”を生み、“踝[xua]拉骨”が優勢の地域で“踝[xuai]拉骨”を生んだということかも知れない。但し陝西省の二地点はこの解釈では説明できない。この二地点は少し離れてはいるが、隴海線沿いの北側に位置し、甘肅省に近い。何故このような“踝[xua]拉骨”優勢地域の西端とも言うべき地域に分布しているのか不可解である。陝西省で“踝[xua]拉骨”が優勢なのは陝北地区で、それ以外でこの語形の報告があるのは西南端の南鄭一地点のみである。麟游、千陽一帯のデータが十分に集まらないので確たることは言えないが、或いは移植によって生じた飛び火的な分布なのかも知れない：

陝西扶風：脚骨棖 tcyo<sup>31</sup>ku<sup>31</sup>tsqæ<sup>35</sup>      踝骨      622

陝西宝鸡：脚巴骨 <sup>c</sup>tcyo pa cku      踝子骨      普通2592

陝西凤县：螺丝拐 luo<sup>24-31</sup>sɿ<sup>31-44</sup>kuæ<sup>02</sup>      踝骨      590

甘肃天水：拐核  $\text{c}^{\text{h}}\text{kuai}$   $\text{c}^{\text{h}}\text{xu}$  踝子骨 普通2562

如上の周辺の方言の例を見てもこの地域の分布傾向は見えず、手がかりが掴めないのだが、方言地図を作成して広域的な分布状況を見ることにより明らかにすることができるかも知れない。いずれの解釈にも問題があるが、現時点では第三の解釈が“踝[xua]子骨”をも説明できるので、最も説得力があると考ええる。

### §5 “核桃”を含む語形

もし§1で述べた“踝 \*yua → yuak”という連音変化があったなら、発音労力の節減による介音の消失が起こって yuak → yak となった、若しくは更に音声的類似から固い塊のようにふくらんだ様が“核 \*yək > yak”を連想させるということがあったかも知れない（この連想については後で改めて論ずる）。“核骨”という語形は管見の及ぶ限りで現代北方方言の調査報告の中には見出すことができないが、“核桃”を含む語形はある。

山东即墨：脚核桃 脚踝 坂本 123

山东寿光：脚核桃  $\text{tcy}\theta^{213-22}$   $\text{xu}\theta^{53-35}$   $\text{t}^{\text{h}}\text{u}^0$  踝骨 102

河北清苑：脚核头 （=河北安次，霸县） 词汇 266

河北昌黎：核桃骨  $\text{x}\text{r}^{24}$   $\text{t}^{\text{h}}\text{au}^0$   $\text{ku}^{213}$  脚腕两侧凸起的骨头 231

（=河北唐山，丰润，乐亭，滦县，大厂，兴隆，定兴；天津宝坻 词汇266）

河北玉田：核桃骨子 （=河北唐山） 词汇266

北京平谷：核头骨  $\text{x}\text{r}^{55}$   $\text{t}^{\text{h}}\text{ou}^0$   $\text{ku}^{214}$  203

cf. 踝子骨  $\text{x}\text{r}^{55}$   $[\text{xuai}^{55}]$   $\text{ts}\theta^0$   $\text{ku}^{214}$  203

河北定州：脚核桃  $\text{tciau}^{33-35}$   $\text{x}\text{r}^{24-42}$   $\text{t}^{\text{h}}\text{au}^0$  1129

cf. 踝子骨  $\text{xua}^{24-42}$   $\text{ts}\eta^0$   $\text{ku}^{24}$  1129

脚踝子  $\text{tciau}^{33-35}$   $\text{xua}^{24-42}$   $\text{ts}\eta^0$  1129

河南密县：脚核桃儿 踝骨 600

陕西澄城：桃核  $\text{t}^{\text{h}}\text{u}_{24}$   $\text{xu}_{24}$  踝骨 614

陝西三原：桃胡/tao<sup>35</sup> hu<sup>35</sup>/ 踝骨 381

陝西耀县：桃胡 踝骨 381

陝西西安：核桃疙瘩(子) xw<sup>24</sup> t<sup>h</sup>au<sup>0</sup> ku<sup>21</sup> ta<sup>0</sup>(tsɿ<sup>0</sup>) 踝子骨 106

陝西蒲城：核桃侷拉 xw<sup>24</sup> t<sup>h</sup>au<sup>31</sup> k<sup>h</sup>ua<sup>53</sup> la<sup>31</sup> 踝骨 709

“核”は“梗開二入麦匣\*ɣɛk>ɣak”と“臻合一入没匣\*ɣuət”の二音あり、いずれも果実の中にある比較的大きなタネを意味する。この二音が異なる由来によるものか、本来一つの語であったものが、特殊な変化、もしくは方言間借用などによって、中古音段階で既にダブルット doublet を形成していたのか不明である。憶測の域を出ないが、“踝骨” yua kuət→yuak kuət→ɣak kuət 若しくは yua kuət→ɣa kuət→ɣak kuət のような変化を遂げて、“踝”が同音の“核”に取り替えられて、“核骨”という当て字が定着した後に、“核”の語義を明確にすべく“桃核”としたものであろう。北京平谷方言のような例が存在するが、恐らく“核骨”から“核头骨”となったのではなく、“核桃骨”から“桃”の主母音が弱化して“核头骨”となったものであろう。筆者の知る限りでは音声形式が明らかな“核头骨”はこの1例のみである。音声表記のない例の中の“核桃”の“桃”の実際の音声形式が [t<sup>h</sup>au] となっているケースがあるかも知れないし、また逆に河北清苑方言などの“脚核头”の“头”が実際には [t<sup>h</sup>au] のようになっているといったケースもあり得る。即断は禁物だが、漢字表記に即して言えば、“踝头骨”という語形の報告例は皆無である。§ 2. 2 で検討したことから分かるように、“踝头”という語がない状況において自律的に“踝骨”から“踝”+接尾辞“头”+“骨”という語構成に転ずるとは考え難い。同様に“核头”という語形も見当たらないからには、“核骨”から“核头骨”といった語形が誕生したとも考え難い。また“踝骨” yua kuət が、“核骨”と当て字表記されるようになり、それが定着した後に、“核”の意味を明確にすべく同義語“子”を重ねて“核子骨”となったと想定する余地はあるにしても、この“子”が名詞接尾辞と解釈されて、更には類似の名詞接尾辞“头”に取り替えられて“核头骨”といっ

た語形が誕生した、というような解釈もまた成り立ち難い<sup>10)</sup>。そしてまた“核頭骨” \*y(u)ak dəu kuət→yak də kuət→yak lə kuət→yak la kuət という変化も考慮するに及ばないということになる。“脚核桃”は“脚核桃骨”の“骨”が取れたか、“核桃骨”から“核桃”となった後に改めて説明の要素として“脚”を前接したものだろう。“桃核”のタイプは“核骨”から“核”の語義を明確にするために“核桃”ではなく“桃核”と改めたということなのだろう。「クルミ」ではなく「モモの種」というような連想が働いている。“核”は既に述べたように果実の真中に（一つだけ）ある大きなタネを指し、「クルミ」や「桃のタネ」はその典型と言える，“核”から“桃核”を連想すると言うのもまた極自然なことである。

陝西方言の例は“核”がいずれも [xu] という音声形式になっているところからして，“踝骨”が \*yuat kuət → yuat ta kuət→yuat tau kuət →xua? tau kuə?→xuə? tau kuə? のような変化を遂げた後，“核桃”への連想が働いて“核桃骨”という当て字がなされたか、或いはその“核桃”が“桃核”への連想が働いたことによって音節の転置が起こったとも考えられる。一説に依ると“核桃”は本来は“胡桃”で、五胡十六国時代に“胡”の字を避けて“核桃”と呼ぶようになったらしい<sup>11)</sup>。ならば“胡”と“核”の間には音声的類似があるべきで，“胡”と“核”の関係は大凡のところ、yo : yuo? (<yuo?) 或いは xu : xuə? のようなものであったろう。ただ上掲例を見ると，“核”が“梗開二入麦匣”由来の音になっている語形もある。音声記号の無い例もあるので断定はできないが、山東寿光方言を除くと，“梗開二入麦匣”由来の音になっている語形は山東、河北方言ばかりで、他方，“臻合一入没匣”由来の音になっているのは陝西方言ばかりである。山東寿光方言にはそもそも [xə] という音節は存在せず、他方言で [xə] で現れる字音は一律に [xuə] になっているから、周囲の状況から見て“梗開二入麦匣”由来の音と見なしても良いだろう。或いは全くの憶測だが，“梗開二入麦匣”と“臻合一入没匣”の二音は本来地理的分布を異にする同義語

で、“臻合一入没匣”の地域で成立した“核桃”（<“胡桃”）を“梗開二入麦匣”の地域が借用した結果、如上の山東、河北地域に見られるような語形が成立したのかも知れない。

## §6 “踝骨” — “孤拐”

“踝骨” *xuai ku* の声母が転置したと考えられるものがある。該当例は以下の通り：

甘肃天水：拐核  $^c\text{kuai } ^c\text{xu}$  踝子骨 普通2562

甘肃白银：拐胡儿/*guāi huer/* 踝骨 888

甘肃张家川：拐踝儿  $\text{kuei}^{42} \text{xuər}^{24}$  踝骨 1408

推定される変化過程は *xuai(tsi)ku* → *kuai(tsi)xu* というものである。このような転置の類例は以下の通り：

山东曲阜：脖拉梗  $\text{pue}^{42} \text{la}^0 \text{kəŋ}^{55}$  脖子 通讯123

          胳膊拉绷  $\text{k}\chi^{13} \text{la}^0 \text{pəŋ}^{13}$  通讯123

山东济南：胳膊拉瓣儿  $\text{kə}_{21} \text{la}^0 \text{per}^{21}$  膝盖 市志145

          波拉盖  $\text{pə}_{21} \text{la}^0 \text{kε}^{21}$  市志145

この解釈の弱点はデータの制約があり、断言はできないが、地理的分布を見るとこの地域では“孤拐”という語形が優勢で、周囲に“踝 [xuai] (子)骨”という語形の分布が見られないということである。今のところは転置が起こったとする見方に代わる有効な解釈を持たないことと、本章で扱う他のタイプの語形をも説明できるところから、この解釈を採用しておきたい。

“踝骨” *xuai ku* の声母が双声化したと考えられるものは以下の通り：

山东临清：踝骨  $\text{kue}^{55-35} \text{ku}^0$  脚腕关节 71

          骨踝  $\text{ku}^{323-44} \text{kue}^0$  71

山东青州：脚拐骨  $\text{tcyə}^{44-214} \text{kue}^{55-44} \text{ku}^0$  踝子骨 山东 191 ← “脚踝骨”

山东博山：脚拐骨ə  $\text{tcyo}^{214} \text{kue}^{55} \text{ku}^{214-31} \text{ə}^0$  踝子骨 研究 136 ← “脚踝骨”

山东淄川：脚怪骨子  $\text{tcyə}^{214} \text{kue}^{31-55} \text{ku}^0 \text{ə}^0$  踝骨 84 ← “脚踝骨子”



- 河南郑州：拐骨 kuai<sup>53</sup> ku<sup>24</sup> 踝子骨 101 ← “踝骨”
- 山西山阳：拐骨 kuæ<sup>52</sup> ku<sup>313-0</sup> 37 ← “踝骨”
- 内蒙古二连浩特：拐骨 ʔkuæ kuəʔ> 踝子骨 普通2562 ← “踝骨”
- 山西大同：拐骨 ʔkuæ kuəʔ> 踝子骨 普通2562 ← “踝骨”
- 山西离石：拐骨 ʔkye ɔku 踝子骨 普通2562 ← “踝骨”
- 山西静乐：拐骨儿 kuei<sup>213</sup> kur<sup>32</sup> 踝子骨 653 ← “踝骨儿”
- 山西娄烦：拐箍儿 kuei<sup>312</sup> kur<sup>33</sup> 脚踝 671 ← “踝骨儿”
- 山西古交：拐孤 kuei<sup>312-31</sup> ku<sup>22</sup> 踝 583 ← “踝骨”
- 河南灵宝：拐骨疙瘩 ʔkuai ku ɔku ta 踝子骨 普通2562 ← “踝骨疙瘩”
- 河北万全：拐骨蛋儿 (=河北怀安) 词汇267 ← “踝骨蛋儿”
- 山西太原：拐子孤 kuai<sup>53</sup> tsɤ<sup>0</sup> ku<sup>11</sup> 踝子骨 FY81-4/305 ← “踝子骨”
- 山西太原：拐子骨 ʔkuai tsə ɔku 踝子骨 普通2562 ← “踝子骨”

これらは“踝(子)骨”が xuai(tsi) ku → kuai(tsi) ku のように変化したものと考えられる。そしてこの語形から以下の語形が成立する：

- 山西太原：孤拐 ku<sup>11</sup> kuai<sup>53</sup> 脚掌两旁突出的部分 词典29
- 山西榆次：孤拐 ku<sup>11</sup> kuai<sup>53</sup> 脚踝 1012
- 山西忻州：孤拐 ku<sup>313-33</sup> kuæ<sup>313-31</sup> 踝子骨，踝部内侧和外侧的突起部分 37
- 宁夏中卫：孤拐 ku<sup>44</sup> kuāi<sup>0</sup> 也说脚孤拐，指脚脖子两旁突出的骨头，即踝骨 129
- 山西左权：鼓拐 ku<sup>53</sup> kuæ<sup>0</sup> 踝骨 45
- 山西原平：鼓拐 ku<sup>213-13</sup> kuai<sup>213-42</sup> 81
- 河南鹤壁：脚箍拐 tcyΛʔ ku<sup>33</sup> kuai<sup>55</sup> 1598

この場合、xuai ku → kuai ku → ku kuai のような音節の転置が考えられる。“孤拐”は“踝骨”がこのような変化をする以前に既に生じていたものなのか、このようにして成立したものが他の似た形状の身体部位にも転用されるようになったものなのか明らかでないが、以下の同じ語形を共有する身体名称がある：

“颧骨”—“踝骨”

- 辽宁岫岩：孤拐 颧骨 159  
 脚孤拐 踝骨 159
- 河北丰宁：脚孤盖 tciɑu<sup>214</sup> ku<sup>55</sup> kai<sup>0</sup> 脚掌两侧突出的骨头 1081  
 脸咕盖 liɑn<sup>214</sup> ku<sup>55</sup> kai<sup>0</sup> 颧骨 1080
- 河北巨鹿：骨拐 ku<sup>33</sup> kuai<sup>55</sup> ①颧骨②踝骨，脚～即是踝骨的突起部分 701
- 河北灵寿：骨拐 ku<sup>22</sup> kue<sup>22</sup> 颧骨 志699
- 山东德州：(脸)骨拐 (liǎ<sup>55</sup>) ku<sup>214</sup> kuai<sup>0</sup> 颧骨 81
- 北京平谷：脸孤拐 liɑn<sup>214-21</sup> ku<sup>35</sup> kuai<sup>0</sup> 颧骨 199
- 河北深泽：脸骨拐 liɑn<sup>45</sup> ku<sup>33</sup> kuai<sup>45</sup> 颧骨 574
- 河北博野：骨怪脸儿 ku<sup>45</sup> kuai<sup>0</sup> lier<sup>214</sup> 高颧骨 志567

上掲の「頬骨」と「踝」に共有される“孤拐”，“骨拐”などと漢字表記される要素（以下“孤拐”で代表させる）はプックリとふくれた部分を意味するようだが，もし如上の“踝骨”より生じた“孤拐”が「頬骨」に転用されたというのでないのならば，この“孤拐”は独自に誕生していたはずで，その字面はその意味内容を表していると思われるが，個々の字からはなぜそのような意味になるのか判然としない。「ほお骨」と「踝」及び「拳」はプックリとふくれている，或いは出っ張っているところから，他の語源の場合でも以下のように同じ語形を共有する場合があります，一方から他方への連想は容易なようである：

“颧骨”—“踝骨”—“耳垂”—“拳头”—“胳膊”—“喉结”

- 河南周口地区：脸骨拽 ʎliɑn ɕku ɕtsue 颧骨 901
- 河南太康：脸骨拽/liɑn<sup>55</sup> gu<sup>24</sup> zhuai<sup>55</sup>/ 颧骨 583
- 河南长葛：脸故拽/liɑn<sup>55</sup> gu<sup>21</sup> zhuai<sup>21</sup>/ 脸蛋 620
- 河南上蔡：脸骨拽/liɑn<sup>55</sup> gu<sup>53</sup> zuai<sup>31</sup>/ 颧骨 647
- 河南密县：脸股拽儿 腮帮 600
- 陕西扶风：脚骨拽 tcyo<sup>31</sup> ku<sup>31</sup> tsu æ<sup>35</sup> 踝骨 622

陕西户县：脚骨棧 tcyɣ<sup>31</sup> ku<sup>31</sup> tsuæ<sup>51</sup> 踝骨 326  
 河南济源：脚骨爪儿 tciɛ? kuə tɕuæ 踝子骨 志521  
 河南濮阳：脸垂子 lian<sup>55</sup> tɕ<sup>h</sup>uei<sup>423-45</sup> tsɿ<sup>0</sup> 脸蛋 92  
     脸垂儿 lian<sup>55</sup> tɕ<sup>h</sup>uər<sup>423</sup> 脸蛋 92  
 山西壶关：忽辘锤 xuə?ɔ luə?ɔ ɕtɕ<sup>h</sup>uei 咽喉 690 ← “喉咙锤”  
 山东滕县：耳朵垂子 ɤ<sup>24</sup> to<sup>0</sup> ts<sup>h</sup>ue<sup>55</sup> tsɿ<sup>0</sup> 耳垂 566  
 河南太康：屁股垂子/pi<sup>312</sup> gu<sup>55</sup> chui<sup>53</sup> zi<sup>3</sup>/ 臀部 583  
 宁夏中宁：胳膊锤子/kuo<sup>31</sup> çhüei<sup>55</sup> zi<sup>55</sup>/ 肘 544 ; çh [tʰ]  
 甘肃静宁：柯锤子 kuo<sup>31</sup> tɕ<sup>h</sup>uei<sup>44</sup> tsɿ<sup>0</sup> 胳膊 109  
 河南郟县：骨朵锥 拳头 557  
 山西原平：圪捶 kɣ?<sup>0</sup> ts<sup>h</sup>uei<sup>33</sup> 拳头 85

河南夏邑：踝子疙瘩 踝 525  
 河南永城：踝子疙瘩 xuai<sup>52</sup> tsɿ<sup>33</sup> kɣ<sup>24</sup> ta<sup>24</sup> 脚踝 565  
 河南商丘地区：踝得疙瘩 xuai<sup>53</sup> tei<sup>0</sup> kə<sup>24</sup> ta<sup>0</sup> 脚踝 1749  
 陕西子洲：踝拉圪堵 xud<sup>33</sup> la<sup>33</sup> kə?<sup>3</sup> tu<sup>213</sup> 脚与胫连接处两旁突出骨 459  
 陕西延川：眉脑圪□ mɿ<sup>35</sup> nau<sup>0</sup> kɜ?<sup>32</sup> tu<sup>313</sup> 前额 74  
 陕西吴旗：眉眼圪堵子 mi<sup>35</sup> niæ<sup>0</sup> kə?<sup>3</sup> tu<sup>52-24</sup> tsə<sup>0</sup> 额头 陕北 117  
 山东平度：气嗓疙瘩 ç<sup>h</sup>i<sup>214-53</sup> θaŋ<sup>0</sup> ka<sup>55-45</sup> ta<sup>0</sup> 喉结 116  
 河北张北：引嗓格蛋儿 喉头 658  
 山西平鲁：咽嗓疙瘩 iey<sup>324</sup> su<sup>53</sup> kə?<sup>12-2</sup> tæ<sup>53</sup> 咽喉 88  
 河南洛阳：屁股圪蛋儿 p<sup>h</sup>i<sup>412</sup> ku<sup>0</sup> kuw<sup>33</sup> tɕu<sup>412</sup> 臀部鼓起的部分 词典17  
 山西翼城：屁股度蛋 p<sup>h</sup>i<sup>31</sup> ku<sup>0</sup> tou<sup>0</sup> tæ<sup>51</sup> 小孩屁股 107  
 山西长治：手咕嘟 səu<sup>535</sup> kuə?<sup>54</sup> tuə?<sup>54</sup> 拳头 85  
 山西万荣：手骨嘟 ɕəu<sup>55</sup> ku<sup>51-24</sup> tu<sup>20</sup> 拳头 志34  
 山西和顺：拳圪掇 tç<sup>h</sup>yæ<sup>22</sup> kə?<sup>21</sup> tuə?<sup>21</sup> 拳头 65  
 山西洪洞：拳圪斗 tçyan<sup>24-22</sup> ku<sup>0</sup> tou<sup>0</sup> 拳头 227

- 山西永济：捶骨嘟 pf<sup>h</sup>ei<sup>24</sup> ku<sup>21-24</sup> tu<sup>21</sup> 拳头 40  
 山西汾西：槌圪都 ts<sup>h</sup>β<sup>35-22</sup> kə<sup>3</sup> tβ<sup>21</sup> 拳头 34  
 山西万荣：槌骨嘟 pf<sup>h</sup>ei<sup>24</sup> ku<sup>24-0</sup> tu<sup>33</sup> 拳头 (县西) 词典176-177  
 山西阳高：皮锤圪督(kə<sup>?</sup><sup>31</sup> tu<sup>?</sup><sup>31</sup>) 拳头 630  
 山西左权：骨堵 kuə<sup>?</sup><sup>22-44</sup> tu<sup>53</sup> 拳头 598  
 山西黎城：骨都 kuə<sup>?</sup><sup>3-31</sup> tu<sup>44</sup> 拳头 598

“孤拐”という語形が“踝骨”とは別個に独自に成立していたと仮定すると、それ自体は“踝骨”との間に類音牽引を生じるほどの音声的類似を示さない。更に既に指摘したように文字に即して「踝」という意味に理解することができないという点でも別個に成立していたとは考え難い。仮に“孤拐”が別個に成立していて、これと“踝骨”との間に類音牽引が生じたとしても、次に論ずる [kuai ku] は説明できても、[kuai xu] という形式を説明することができないという問題が残る。晋語には以下のような逆の語順の語が見られる：

- 山西原平：沫唾 mɔ<sup>?</sup><sup>4</sup> t<sup>h</sup>uɣ<sup>53</sup> 唾沫 79  
 山西平定：沫唾儿 mə<sup>?</sup> t<sup>h</sup>ur<sup>33</sup> 唾沫 598  
 山西忻州：沫唾 mə<sup>?</sup><sup>2</sup> t<sup>h</sup>ue<sup>53</sup> 唾沫 315  
 山西阳曲：沫唾 mə<sup>?</sup><sup>2</sup> t<sup>h</sup>uɔ<sup>?</sup><sup>2</sup> 唾沫 80  
 山西定襄：泌唾 miə<sup>?</sup><sup>2</sup> t<sup>h</sup>uɔ<sup>53</sup> 唾沫 43  
 山西孟县：泌唾 miy<sup>?</sup><sup>2</sup> t<sup>h</sup>uo<sup>44</sup> 唾沫 37  
 山西寿阳：墨唾 miə<sup>?</sup><sup>22</sup> t<sup>h</sup>uəw<sup>45</sup> 唾沫 28  
 山西武乡：弥唾 mɿ<sup>55</sup> t<sup>h</sup>uɣ<sup>0</sup> 唾沫 30

また寧夏同心方言には以下のような語形がある：

- 宁夏同心：孤孤踝子 ku<sup>55</sup> ku<sup>0</sup> xue<sup>53</sup> tsɿ<sup>0</sup> 踝子骨 词典51

本章で扱う一連の語彙が“踝骨”ではなく、“骨踝”を起源としている可能性もなきにしもあらずである。しかしこのような構成要素の転置の類例は晋語圏以外では見られないのに反して<sup>43</sup>，“孤拐”の分布は既に指摘したように

晋語地域に留まるものでなく、北方中国全域にわたって満遍なく分布している。如上の逆の語順の構成の語が見出せないような地域にも分布しているということであるから、“骨踝”という語形を起源とする想定は成り立たない。“骨踝 ku xuai”，“骨踝 ku xua”に該当する語形が、管見の及ぶ限りで上掲の寧夏同心方言を除けば1例も見当たらないということも否定の論拠の一つとすることができる。転置語形を元にしたとは考え難いということになると，“拐孤”から“孤拐”への変化もまた認められないということになりそうだが、この場合は連音変化によって語源があやふやになり、語構成について配慮されることもなくなってしまったと考えれば良いだろう。もし“古怪：風変わりである”という語が広く用いられているものならば、これとの間に類音牽引が生じた可能性もある。結局のところ“孤拐”は“踝骨”が変化して出来た語形に当て字がなされたものである可能性が高い。“孤拐”は上に指摘したように「頬骨」などを言う場合にも用いられる。所与のデータからは「頬骨」から“孤拐”が生じたとは考えられないので、「踝」を基に生じたものであると見なし、同じ形状である「頬骨」に転用されたものと考えておく。

#### 注

(8) 「股」の方は「カラス貝」, 「よだれ」を表す語形との間に類音牽引を生じたと思われる語彙がある。当面のテーマとは離れるので、以下にその一端を記すに留めたい：

河北高邑：海拉八儿 蚌 655 =元氏 469, 新乐 686

河北灵寿：海拉巴 河蚌 志705

和拉子  $xə^{22}la^{22}tsə^0$  涎水 志700

河北张家口：腿哈拉  $t^huei^{55}xʔ^{32}la^{42}$  胯下 志1909

颌拉水  $xʔ^{32}la^{42}suei^{55}$  口水 志1908

河北巨鹿：腿閔兒儿  $t^hei^{33}xə^{31}lar^{21}$  两腿之间 703

喝拉拉  $xə^{33}la^{33}lar^{33}$  口水, 唾涎 701

資料上の制約で、一方言で問題とする語彙が揃う場合が稀なのでこれらの例だけからでは分かり難いかもしれないが、先に挙げた「股」の例と比べるとその類似をより強く見てとることができるであろう。

(9) 方言調査報告の兒化韻の音声表記は不完全な形態音韻論的表記であることが多い。この場合も [meir] の実際の音価は [mɤ] である可能性が高い。山東方言の「蚕」にはこの他以下のような例がある。

山東寿光：蚕们儿	ts <sup>h</sup> ã <sup>53-35</sup> mǎr <sup>0</sup>	蚕	130	；	“儿li <sup>53</sup> ”
山東臨淄：蚕们儿	ts <sup>h</sup> ã <sup>42-213</sup> mǎr <sup>0</sup>	蚕	564	；	“儿lǎ <sup>42</sup> ”
山東臨朐：蚕们儿	tθ <sup>h</sup> ã <sup>42-55</sup> mǎr <sup>0</sup>	蚕	564	；	“儿lǎ <sup>42</sup> ”
山東利津：蚕妹儿	ts <sup>h</sup> ã <sup>53-55</sup> meir <sup>0</sup>	蚕	107	；	“儿lǎ <sup>53</sup> ”
山東博興：蚕妹儿	ts <sup>h</sup> ã <sup>53-44</sup> meir <sup>0</sup>	蚕	594	；	“儿lǎ <sup>53</sup> ”
山東博山：蚕妹	ts <sup>h</sup> ã <sup>55-24</sup> mei <sup>0</sup>	蚕	研究 124	；	“儿lǎ <sup>55</sup> ”
山東淄川：蚕妹	ts <sup>h</sup> ã <sup>55-24</sup> mei <sup>0</sup>	蚕	130	；	“儿lǎ <sup>55</sup> ”

形態音韻論的表記の中途半端な例としては -n 韻尾韻の兒化韻をあたかも鼻母音であるかのよ  
うに表記する例が少なくないが、仔細に例を検討すると -i 韻尾韻の兒化表記と混乱している  
ところが見られ、実際には鼻母音でないことが分かる。上掲例の二音節目の実際の音声は最後  
の二例以外はいずれも [mɤ] であろうと思われる。聊城方言と異なり、これらの方言では“儿”の  
字音と兒化韻との間にズレが見られるが、これは兒化韻を形声するのに関わった“儿”が単字  
音形式では現れなくなってしまったと解される。つまり単字音形式は恐らくより新しい層の字  
音に取り替えられてしまったのである。

(10) また別に以下のような例もある：

“壁虎”

河北秦皇島：蝎拉虎子 cie<sup>35</sup> ly<sup>0</sup> xu<sup>214</sup> tsɿ<sup>0</sup> 壁虎 117(=河北山海关 606)

河北固安：蝎了虎子 cie<sup>55</sup> la<sup>0</sup> xu<sup>214-21</sup> tsə<sup>0</sup> 壁虎 834

河北定興：蝎里虎子/xie<sup>33</sup> li<sup>0</sup> hu<sup>213-21</sup> zi<sup>0</sup>/ 126

蝎里虎儿/xie<sup>33</sup> li<sup>0</sup> hu<sup>213-21</sup> [uər]/ 126

北京平谷：蝎拉虎子 cie<sup>35-55</sup> la<sup>0</sup> xu<sup>214-21</sup> tsə<sup>0</sup> 壁虎 180

北京密云：蝎拉虎子 cie<sup>55</sup> la<sup>0</sup> xu<sup>214</sup> tsə<sup>0</sup> 壁虎 636

河北青县：蝎拉虎子 cie<sup>42</sup> la<sup>0</sup> xu<sup>213</sup> tsɿ<sup>0</sup> 壁虎 756

河北平乡：吸溜虎儿 ci<sup>21</sup> liou<sup>53</sup> xur<sup>55</sup> 壁虎 866

天津东丽：蝎列虎子 壁虎(么六桥村话) 908

これらの方言形式に見られる“蝎”に後続する[1]で始まる第二音節もまた概略、

\*hiɿt ho→ɕiɿt tɿ ho→ciə? la xu→ciə la xu

というような変化を経て、“蝎”がかつて持っていた入声韻尾 -t を二音節化して声母の形で残し  
た結果かも知れない。但し、そうであれば“壁虎”という語形がかなり古くに成立していたこ  
とになる。他に“蝎虎留子”“蝎虎鲁子”というような、[1]で始まる音節が“虎”の後に  
来る語形も存在しており(今具体的な地名、音声表記は省略)、これらとの関係についても検討を  
加える必要がある。如上の変化を推定するに当ってはなお慎重であらねばなるまい。

(11) この論法で行くと“核儿”はあるから、“核儿骨”は存在の余地があるが、この語形も今  
のところ報告例はない。類似の形式としては陝西綏徳方言の“踝二骨”、子長方言の“滑二骨”が

あるが、この語形の成立については § 2.2 で論じた。

- (12) 『老朴集覽』 朴上2-1に見える (李丙疇『老朴集覽考』 進修堂1966.3)。『朴通事諺解』 上4表に見える割注はこれに基づく。現存の『老朴集覽』が原本と異同のないものであるならば、同書の成立は1517年以前らしいから、この記述もまた1517年以前のものということになるが、何に基づいているのか不明。田村祐之「『朴通事諺解』 翻訳の試み」『饗養』4 1996.9 pp.57-91 の pp.84-85 及び山川英彦「『老朴集覽』 覚え書」『名古屋大学文学部研究論文集』 LXX 文学24 1977.3. pp.61-72 参照。
- (13) 動物のオスメスを表す要素が後置される例は他の北方方言地区でも見られるが、例えば“鸡母”などは「メンドリ」ではなく「ニワトリのメス」というような語構成ととるべきやも知れず、それを除けば該当例は見当たらない。

河南信阳地区：鸡公 公鸡。(新县，光山，信阳市，信阳县) 940

(= 陝西南郑 644, 石泉 686, 镇巴 649; 甘肃陇西 707, 舟曲 676)

陝西凤县：鸡公 tci<sup>214</sup> kuŋ<sup>02</sup> 公鸡 593 (= 甘肃张家川 1413, 通渭 664, 成县 821)

河南信阳地区：鸡婆 母鸡。(新县，光山，信阳市，信阳县) 940

陝西凤县：鸡母 tci<sup>214</sup> mu<sup>02</sup> 母鸡 593

陝西吴旗：鸡婆儿 tci<sup>3</sup> p<sup>buor</sup><sup>41</sup> 母鸡 908 (= 延安 715)

山东平邑：山羊母 ʃan<sup>213-21</sup> iaŋ<sup>0</sup> mu<sup>34</sup> 母山羊 78

山东郟城：山羊母儿 ʃæ<sup>213-22</sup> iaŋ<sup>55</sup> mur<sup>24</sup> 母山羊 85

山东微山：山羊母子 sā<sup>213-21</sup> iaŋ<sup>0</sup> mu<sup>35</sup> tsŋ<sup>0</sup> 母山羊 1125

山东枣庄：绵羊母 miæ<sup>55</sup> iaŋ<sup>55</sup> mu<sup>24</sup> 母绵羊 83 (= 山东滕县 563)

山东郟城：绵羊母儿 miæ<sup>55</sup> iaŋ<sup>55</sup> mur<sup>24</sup> 母绵羊 85

(待続)

\* 本論文は平成15年度文部科学省科学研究費 基盤研究 (B) (課題番号 13410130) 「歴史文献データと野外データの総合を目指した漢語方言志研究」の研究成果の一部である。